

踏むことができた、という。

満州駐屯から北方守備へ

熊本県 坂井徳長

私は熊本県八千代郡千丁町大牟田という日本一の豊表の産地の農家の長男として生れ、当時、二町三反歩を耕作する農家でした。米麦のほか、藎草いぐさを作付けし、豊表を製造するのです。女の人は朝早くから夜遅くまで豊表を織っていました。その当時、豊表は毎日現金に換わるよい副業でした。

私は兄弟が多く十人いました。二歳違いで家には子どもがぞろぞろいました。父も母も十人の子どもを育てながら夜は遅くまで働いていたし、いつ寝るのかと思う時もありました。ただ子供も学校から帰ると、皆それぞれ仕事をしていました。当時農家も戦争で食糧不足で、米麦は供出制度で自分の作った米は全部供出して、不足すると外から買っても供出していました。苦しい時代でした。私と友人の二人は、昭和十八（一九四三）年二

月一日、歓呼の声に送られて千丁駅から出発しました。村長様、学校の先生、寺の坊様、婦人会長様をはじめ村中総出で、神社で武運長久を祈願し、「国のため、陛下のために頑張ってください」と、全員で送ってくださいました。

当時は、ラジオのニュースでも日本軍の苦戦など報ぜず、毎日戦勝戦勝のニュースばかりで、「兵隊さんは、国のために命を捧げて来て下さい」と、これが送ってくれた人々全員の挨拶でした。

私は熊本市にある歩兵第十三連隊歩兵砲中隊でした。入隊して二カ月、初年兵教育が始まりました。何故か初年兵の時は腹が減るもので、自分の配給では満腹せず、上官の残飯を食っていました。初年兵は何故腹が減るのか理解できませんでした。

ある時、戦友が許可なく売店（酒保）に行つて饅頭を食つたと言つて上等兵から全員呼び出され、木銃で叩かれ、立ち上がれないほどでした。全員震え上がった思い出があります。人間腹が減ると人の残飯でも食うので、浅ましいものです。

私の母は熊本の初年兵当時、毎週のごとく饅頭やおはぎ、または煮しめ等、自分の家も配給で何もないのに、どう工面するのか、御馳走を作つて面会に来ていました。本当に「母は強し」であると共に有難いものです。

昭和十八年四月一日、熊本を出発し、門司港から釜山へ上陸しました。船の上で大きな波を見ながら戦友と、どんなところへ行くのだろうと不安に話していました。朝鮮から満州に入ると中国人の服装、そして街並や風景やらが刻々と変化し、馬車や人物も変わり、戦場に向かう汽車の中では、全員が、だんだん口数が少なくなり、無言の圧力を感じました。

出発してから一週間の旅で満州の海拉爾ハイルンに着きました。ここはまだ寒く、残雪があつたようです。見渡す限りの大草原の真中に小さな駅、民家がポツポツとあり、遊牧民の土地には馬や羊等の牧畜がなされているのが見え、大陸に着いたなどの実感と共に不安の始まりでした。

海拉爾に着くと編成替えがありました。私と山口一美、中村、国武と四人は歩兵第六十四連隊に転属となりました。そして我々三人は毒瓦斯兵を命ぜられました。普通の初年兵教育のほかに毒瓦斯の教育を受けるのは大変です。防護服を着け、駆け足そして処理作業など息苦しいし、いまにも死にそうになりました。

六カ月の初年兵の基本教育が終わると、今度は独立速射砲中隊要員となりました。今度の速射砲は、今までの馬で牽引するのではなく、自動車にて牽引すると言う、当時まだ日本には少ない重砲でした。アメリカ、ソ連等の戦車を攻撃出来る数少ない速射砲だと言っていました。

当時、射撃については、関東軍司令部より表彰を受けたことは今でも思い出になっています。ただその教育の厳しさは言葉では表現出来ません。

一人が失敗すれば、その場で全員が鞭等の制裁を受けた。一日の教育が終わり、食事を採り、夜の点呼も終わり、全員眠っていると「総員起床」で

の飯が食べたいな」と話しをするようになり、食糧事情も日々悪くなってきました。冬の海拉爾は寒く耐えがたい時もありましたが、春から夏の海拉爾は本当に良いところでした。

ホロンバイル高原に春風が吹くころになると、高原に花が咲き乱れ、野原には牛や馬や山羊、羊等が放牧され、遊牧民の住宅が立ち並び、また蒙古人が信仰するラマ教の寺院や宗主は満州独特の雰囲気がありました。また演習や野営の時、川に入り、藻の下を探すと魚が沢山獲れました。日本の故郷で獲れる鮎とか鯰等、熊本で獲れる魚が多く獲れたのです。世界は広いようで狭いものです。

ようやく満州の生活や気候に慣れたころの一年六カ月が過ぎる八月、隊長より「近い内に編成替えをする」との情報が入りました。心配していると、発表がありました。発表の結果、八代郡の故郷から同じ隊にきている四人が二人、二人に分かれるようになりました。

そして私と作田君は北方に、松永君と宮本君は

ある。目をこすりながら起きると「室内に塵がある、掃除が悪い」とビンタです。塵がなかったのと全員目を丸くする。

また鉄砲の手入れが悪いと、机の上に並べ、その上に正座させるのです。十分も座れない、膝から血が出るのです。また満州の室内には暖房用のペチカがあり、それに登れということです。何度挑戦しても登れないのです。それを見て班長が喜んでいのです。悪いイジメですね。今の常識では考えられないことです。

海拉爾の冬は寒く、ソ連との国境も近くて、寒い時は気温が零下五〇度近くに下がり、臉も凍るのです。その寒さは経験、体験した人でないと分かりません。私の戦友の中に演習で道に迷い凍死した者がいたのです。本当に体力のない人は苦勞します。

そのころになると満州でも食糧不足を感じるようになりまし。満州で生産される大豆と高黍が主食に代わるようになりました。戦友同士で「米

南方でした。その情報で私たちもショックでしたが、その夜四人は同じ寢床で一晩中語り明かしました。そして誰かが生きて故郷に帰ったら、戦友の実家を訪問することを約束しました。それが友人との最後の別れでした。

私と作田君は独立速射砲八木隊に編入され、大隊の指揮班となりました。

北方への転出命令により昭和十九年八月一日の一番暑い中、貨物列車に乗り釜山港までの長旅に出ました。当時の貨車は牛や馬を乗せる時の窓が一方所あるだけ、便所もない、蓆を敷いただけの中は、全員が足も伸ばせないほどの広さでした。暑いし喉は乾くし、水を呑むと下痢をする人は出るし、便所はないし、さながら地獄でした。今思うと全員若かったから耐えられたかと思えます。

満州、朝鮮半島を経て釜山港から船に乗った時、一年八カ月ぶりの海は波が大きく、貨物列車で体力が衰え、それに船酔いのため、全員が青ざめていました。そして底知れぬ不安と恐怖に襲われ

全員無言でした。そして小隊長に聞いても「何も知らん」の一言だけでした。

昭和十九年八月七日、博多港に着きました。隊長に「この港はどこか」と聞くと、九州の博多だと聞いていたのですが、ここでは二時間くらいしか時間がありませんでした。当時は民家には電話もなく、熊本隣の県まで来ていて、四時間か五時間で父母に面会出来るのと思うと、皆で心では「会いたいな」と思っていました。皆無言で涙を出していました。

私は八木隊長付でしたので、「これから何処へ行くのか」と聞きますと、今度は「東京までだ」と言っていました。九州にいたのは二時間くらいです。博多から旅客列車に乗りました。一昼夜で東京に着いて、三時間ぐらいして、また列車で一昼夜して、着いたところは北海道の根室でした。根室市の小学校を兵舎として借りました。

内地にきて仮住まいで、する仕事もなく、休日には魚釣などをして、本当に天国でした。隊長には、全員驚きかつ喜びました。そして全員で刺身をワンサとたべました。そこで下痢する人が出るやら大騒ぎでした。

島には本土からの住民とアイヌ住民がいました。山は小高い山ばかりで、竹や白樺の木を切り、燃料にっていました。冬は雪が多いので、生の白樺を暖炉に燃やしていました。油分が多く良く燃えました。竹は小さい竹で、ほかに熊笹が多く生えていました。それを根から掘り起こして畑を作り、大根など、何でも良く収穫できました。冬は雪が多くカンジキかスキーでないと外に出られず、毎日スキーの練習をしました。戦友の中には練習中に転んで怪我をし、一生、障害者になった人もいました。

銃剣を身に着け、カンジキやスキーを履いて雪道を進む訓練を二カ月位、毎日練習しました。ようやく一人前に滑れるころになって春がきました。魚は毎日全員で食べ切れぬほど良く獲れました。島の漁民の方々は本当に良い人たちでした。「兵

「このまま駐屯するのか」と聞くと、私たちより先に行った鹿児島部隊が潜水艦に攻撃されたとのこと。その鹿児島「第五八部隊は潜水艦攻撃を受け、全員死亡したので、いま時間を掛け漁船を用意している」との返事でした。

昭和十九年八月二十五日、我が大隊は小さな漁船を用立てして、二十人位ずつが分乗して出発しましたが、波が高く、前の船が見えないほどの荒波で、このまま海の中に沈むのかと思いました。着いたところは南千島の色丹島でした。島で一番大きな港は穴間港で、元タラバガニの工場の後は部隊の本部としました。第五中隊を港の外に配置し、我々は八木本隊の本部にいました。

島に着いて、まず炊事をするのに薪を採りに山へ行きますと小川があり、その小川を見ると五十センチ位の大きな魚が数十匹群れをなして上っています。驚いて川の中へ飛び込み、魚と格闘の末、魚を川縁の上に放り上げ、持ち帰りました。満州暮らしが長かったので、このようなことは初めて

隊さん、行くべー」と毎日誘ってくれました。当番を決め船で行くのに船酔いが酷い人もいましたが、日々慣れてきました。

栈橋から、籠の中に残飯を入れ、海の中に下げていると良く海老が入っていましたし、タラバ蟹をカマス一杯一円で分けてくれました。タラバ蟹も食べ切れず、卵だけを食べていた時もあります。天気の良い時は沖で鯨が潮を吹きながら泳いでいました。

我々の仕事は色丹島の防衛であったので、穴間湾に重砲を据えるため毎日掩体壕を掘っていました。人間目掛けて蛸が大きな足を出してきたとがあります。いま思うと本当に夢の島であり、宝の島でした。春には野原に花が咲き、野菜も採れ、全員元気で軍務についていると、急に本部から「本土防衛の命令だ」との指令がありました。本土防衛と言っても、いま戦況はどこでどうなっているのか、我々兵には一部の情報が入るのみで、我々兵隊には全く不明です。不安のまま漁船に分

乗して色丹島を出発しました。

昭和二十年五月十八日、根室に上陸、根室に一日滞在して、勇払郡早来町に駐屯するようにになりました。最初はテント暮らしでしたが、山の面を切り取り、谷間に兵舎を作りました。部隊には大工が何人かいたし、当時は、毎日のように空襲を受けていましたから、空襲を避ける苦肉の策として山の谷間を利用して兵舎作りをするのは本当に良いことでした。

情報によると沖縄の戦況がおかしい、その内、本土決戦になるだろう。今度は本土で米英との決戦に参戦する日が近いとの情報などがばらばらに入って来ていました。毎日空襲や艦砲射撃を受けました。それに対して我々速射砲大隊には、未だに一門の砲もないのです。小銃が少々と短剣があるのみで、ほかの装備は全くなく、毎日戦車の下に箱爆弾を自分の身と共に持ち込む訓練と演習でした。いわゆる自爆あるのみという戦法の訓練ばかりでした。

つの間にかどこへ行ったか姿を見せずに早々と行方不明になった人など、それは様々でした。そして山の中に全員隠れているとか、射殺されるとかのうわさ話が飛び交いました。

昭和二十年十一月末、やっと帰郷の命令が出ました。戦友の中には北海道の女性と結婚して残る人が数人いたし、早々に部隊の前から姿が見えなくなつた人などを残し、我々は帰郷の道に着きました。

汽車の中は軍人や、食糧不足で買い出しに出る人々で足の踏み場もなく、列車の通路はもとより網棚の上まで、それは凄まじいもので、今では想像もつかない有様でした。汽車の中から米兵などの姿を見ると何となく不安でしたが、別に何事もありませんでした。

今思うと汽車の中からでしたが、東京、大阪、名古屋などの大都会はもとより、工業都市は見渡す限りの焼け野原で、人が住める場所などない、どうして暮らしているのかと思いました。九州に

また食糧もなく、山に行つて山菜採りです。山菜の蒨せきが多く採れたので乾燥していましたし、自活班を作つて農家の畑を借りて農業をし、ほうれん草や南瓜、大根などいろいろの農作物を作っていました。また日々の食糧を確保するため四人位で苦小牧まで調達に行っていました。苦小牧には製紙工場があつたので、ここもよく空襲や艦砲射撃がありましたが、その都度、全員列車の下に避難していました。

宮村班長以下十人の自活班がいろいろの野菜を作り、全員長期戦の準備ができたところ、八月になつて八木隊長より全員に「今日は天皇陛下のお言葉があるから、全員良く聞きなさい」との話がありました。

全員ラジオで、天皇陛下のお言葉を聞き、日本は戦争に負けたと泣き叫ぶ者、日本の若い女性はどうなる、米英の餌食になるだろうと話す人、または剣を引き抜き上官（今までイジメていた）を追い回す者、また興奮して自分で腹を切る人、い

入つても小倉市や八幡、大牟田市、熊本市も焼け野原で、果して自分の家はあるのかどうか不安でした。

家に帰ると、家も家族も何とか無事であつたので、本当に喜びました。私は農家の長男ですから、帰る早々に仕事が待っていました。ただ当時は、農家には肥料や農薬もなく、作物は害虫に食われ放題で不作でした。当時の日本の食糧は不足し、配給制度下であり、農業でも一反歩当たり何俵と言う米の供出制度があり、不作で収穫の少ない時には、外から買つて供出せねばならず、それは苦労の連続でした。そして政府の配給だけでは不足するので、若い子供のいる家は、自分の着物や家具を売つて、食糧を買つて生活していました。今の人には、このような当時のことは想像もつかないと思います。

本当に戦争は怖いです、二度と戦争はしてはいけません。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十八年二月一日、熊本市の歩兵第十三連隊歩兵砲中隊に入隊、二カ月の初年兵教育後の四月一日、熊本を出発、門司港、釜山を経由して約一週間の旅で満州の海拉爾に着く。ここで編成替えがあり、歩兵第六十四連隊に転属となる。そして特業として毒瓦斯兵を命ぜられ、苦しい教育、訓練を体験する。こうして六カ月の基本教育が終わると、独立速射砲中隊要員となる。当時の速射砲は自動車牽引式で当時、日本には少ない重砲であった。

体験記は、満州及び海拉爾の風物、気候を描き、初年兵教育、内務班の体験を記録しているが、満州でも食糧不足を感じるようになり、「米の飯が食べたい」など食糧事情も日々悪くなっていく状況が記されている。

こうして満州の生活や気候に慣れた一年六カ月が過ぎた八月、編成替えとなり、独立速射砲八木隊に編入される。そして昭和十九年八月一日、満

州から釜山港に出て七日に博多に着き、さらに根室まで行き小学校を兵舎として、色丹島へ行くための漁船の準備待ちの待機となる。

昭和十九年八月二十五日、漁船に分乗して色丹島へ上陸、守備に着く。そして穴間湾に重砲を据えるための掩体壕を掘っていた時、本土防衛の命令がきて、昭和二十年五月十八日、根室に上陸、根室に駐屯して本土防衛の体制に入った。

この本土防衛軍も、毎日空襲と艦砲射撃を受けた。それに対して速射砲大隊には未だに一門の砲もない。小銃が少々と短剣があるのみで、毎日戦車の下に箱爆弾を自分の身と共に持ち込む訓練と演習、これが本土防衛の戦法と訓練であったと記録している。